第 11 章　風景式庭園の夜明け　　［下線部は『都市緑化技術』No.117 掲載箇所］

（仮訳）

“Shade above shade, a woody theatre　　木陰に重なる木陰、森の劇場
Of stateliest view ……”　　その荘厳な眺め
MILTON, *Paradise Lost*　　ミルトン『失楽園』

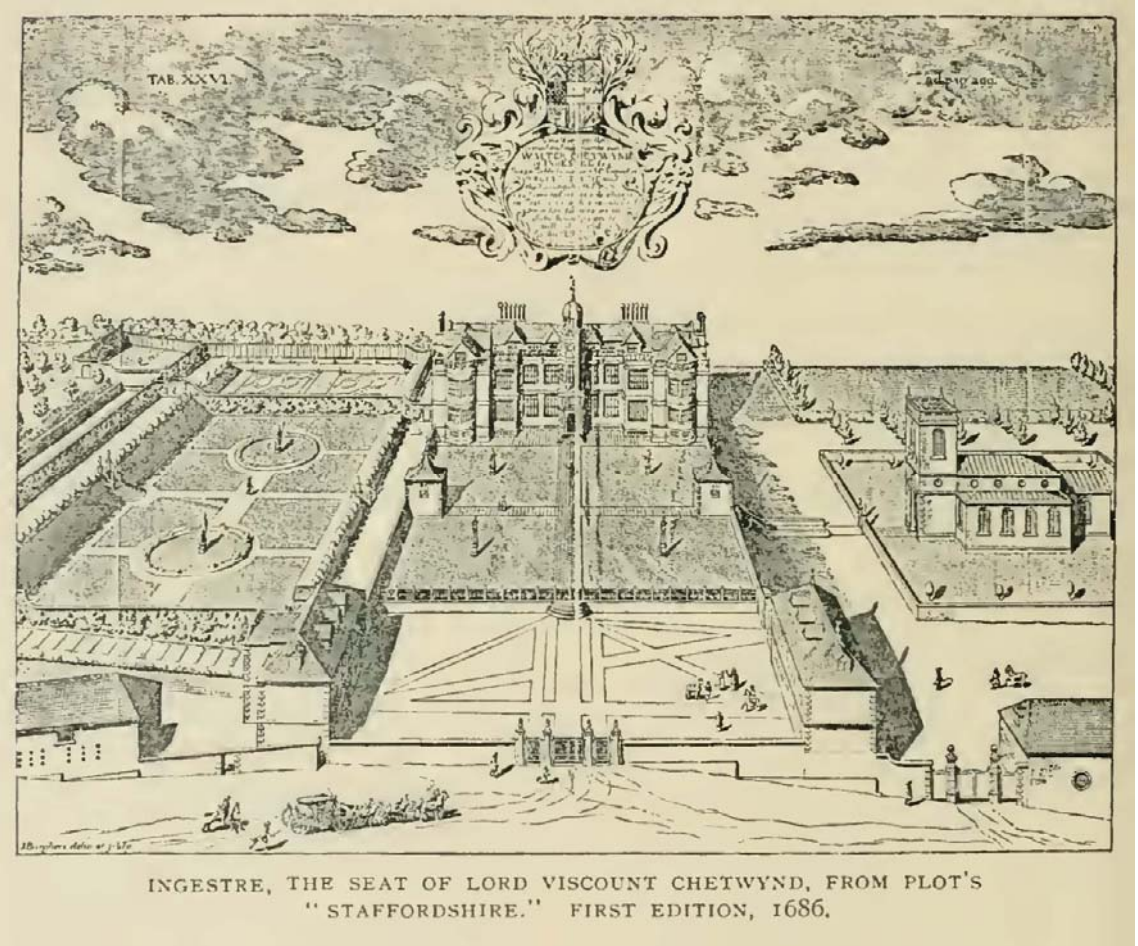
“Shower every beauty, every fragrance shower　　ふり注げ美しさのすべてを、すべての香りをふり注げ
Herbs, flowers and fruits; …”　　ハーブよ、花よ、そして果物よ
THOMSON, *Seasons*　　トムソン『季節』

庭園のデザイン、そして植物の栽培、植栽に関してロンドンとワイズに追随した庭師たちとしてはスティーブン・スウィツァー、その後にはブリッジマン Bridgeman［1690～1738 年］がいた。これらの男たちは整形式庭園が衰退していく中にあって忙しかった。アディソン Addison［1672～1719 年］とポープ Pope［1688～1744 年］が最初に古いスタイルを笑い物にし、「自然の模倣」を流行に持ち込もうとしたのはアン女王の時であった。しかし、昔の庭園への反発と破壊は後に至るまで開始されることなく、彼らの理論が広がるには時間がかかった。この時期に庭園に関する見解やデザインがなかった訳ではなかった。それらは郷土史 County Histories［訳注］の中に見出すことができ、たとえばプロット Plot［1640～96 年］のスタッフォードシャー州、アトキンス Atkyns［1647～1711 年］のグロスター、そしてダグデイルのウォーウィックシャー州の郷土史であり；また 1707 年にライデンで出版されたバーヴェレル Beeverell の「大ブリテン島とアイルランドの最高の楽しみ」“Les Dèlices de la Grande Bretagne et de l’Irlande”、キップ Kip［1652/53～1722 年］による数多くの眺望図が載せられた 1709 年『図説ブリテン』*Britannia Illustrata*、このほかにも同様の出版物があった。

［訳注：古代イングランドの地方区分ごとの歴史地勢誌。16 世紀以降、古物収集家により編纂される］

もしこれらの本の著作者が、こんなにも多くの庭園が全滅すると予見していたなら、彼らのデザインをこれ以上ありえないほど注意深く保存することができたであろう。しかし、これらの絵のほとんどは頭の中で作られたもののようで、館、庭園、そして周囲の景観の鳥瞰図が、通常の計画のように、遠近法と関係なく描かれていた。多くの場合それは忠実な描写であったが、それを見ると整形式庭園はすでに詩情をすべて失っていた。春のブナ beech の垣根の優しい若葉の淡い色あい、冬のイチイの囲いの柔らかな緑、あるいはつる植物が巻き付いたあずまやも白黒の固い線で落とし込まれるとすべての魅力を失ってしまうのである。インジェスターIngestre の庭園のことは、キャバシャム Caversham 出身の一人

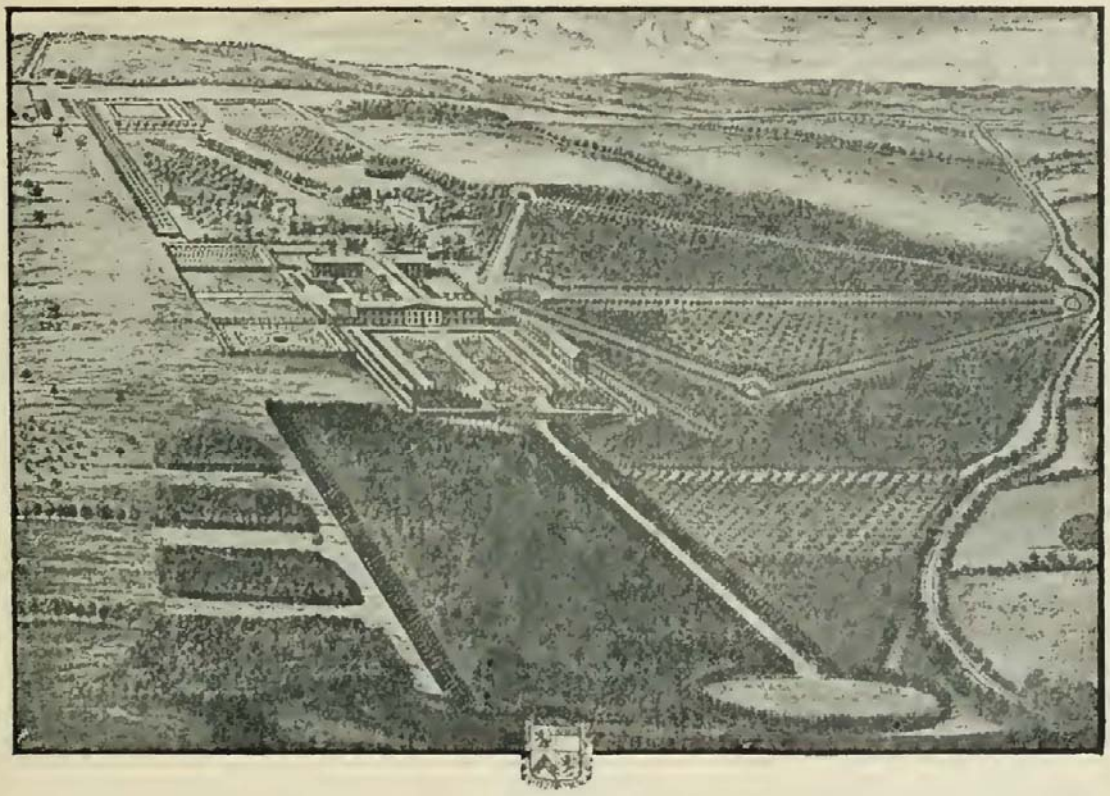
の旅行者、ジョン・ラヴデイ John Loveday［1711～89 年］により 1732 年に描写されている。館は丘の横に位置し、「庭園は高いところにあり、広くて－想像の限り堂々とした樹木の間を通る立派な園路の中に配置され、木が生い茂る庭園あたりには野ウサギがたくさんいて、建物は眺望を得るために高い所に建てられ・・・これは教会とともにプロットの 299 ページに掲げられている」。ラヴデイが触れている絵はここに複製されており、これらのデザインがオリジナルな美しさの一端を伝える上ですらいかに不適切なものであるかを衝撃的な形で示している。



［図 11−1］インゲストリ　チェトウィンド子爵卿閣下の居所
プロットの「スタッフォードシャー」より　第 1 版　1686 年

そのことは、自らの衰退をもたらした整形式の技術の退廃であると言われてきたが、アン女王の時代の庭園の中にはこれ以上魅力的なものを想像することは難しいものもある。その主要な特徴とは刈り込まれた木々の間を通る長い園路が普遍的に使われていたことで、これらの木々とは厳密には生垣のことではなく、木が一定の高さにまで刈り込まれていて、自然な形で上が先細になっているものである。この最も珍しい実例はエセックスのダウン

ホールで見ることができる。



"CASHIOBURY, THE SEAT OF THE RT. HONBLE. THE EARLE OF ESSEX IN HARTFORDSHIRE."
FROM AN ENGRAVING BY KIP.*

［図 11−2］「カシオベリ　エセックス卿の居所　ハートフォードシャー」
キップの版画より（*189 ページ参照）

木は 60 か 70 フィートの高さに刈られ;その間の散策路は 15 フィートの幅で、長さは 780、そして一番端はハットフィールド・ブロード・オークの眺めで閉じている。この庭園はこの場所が修道分院長、詩人、そしてオックスフォード卿ハーレー［1661〜1724 年］の共同所有であった時に造られた（†現在はルークウッド卿の土地）。修道分院長は、"Derry down down, hey derry down"と彼自身がこう呼んだここを初めて訪れた時にユーモラスな詩を書いている。彼はそこで見つけることを期待したのは、

"‥‥gardens so stately, and arbours so thick,　・・・庭園はとても威厳に満ち、木々はこんもりとし
A portal of stone, and a fabric of brick"　石でできた門、そして煉瓦の壁

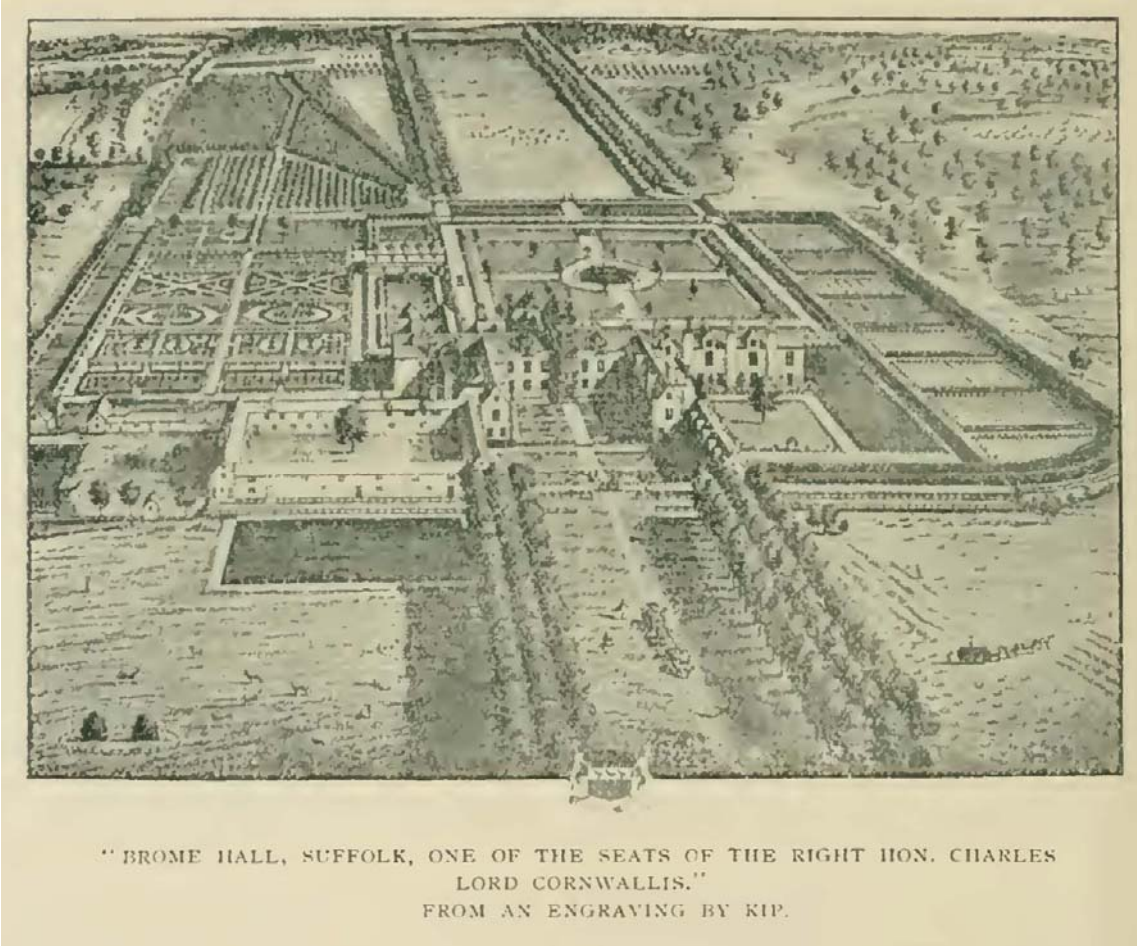
しかし、目的地に着くや、詩人がその友人に叫んだのは、

"O Morley, O Morley! if that be a hall　おおモーリー、おおモーリー！もしこれがホールなら

The fame with the building will suddenly fall.”　建物の名声はあっと言う間に消え失せるだろう

これに対し彼が得た答えは、

“I show’d you Down Hall; did you look for Versailles?”　ご覧に入れたのはダウンホール、ヴェルサイユでも探しておられたか？



［図 11−3］「ブロムホール　サフォーク　チャールズ・コーンウォール卿閣下の居所の一つ」　キップの版画より

修道分院長はここに長年住み、新しい庭園をデザインし、オックスフォード卿が加えたこれらの改変には現在の主庭園も含まれており、そこにはオランダ風のツゲの生垣と刈り込まれたシデ hornbeam の長い壁が作られていた。別の魅力的な実例としてはヨークシャー州のブラマム Bramham のものがある（*レイン・フォックス氏所有）。庭園の基本計画はスウィツァーの本に描かれているものと同じようなものである。

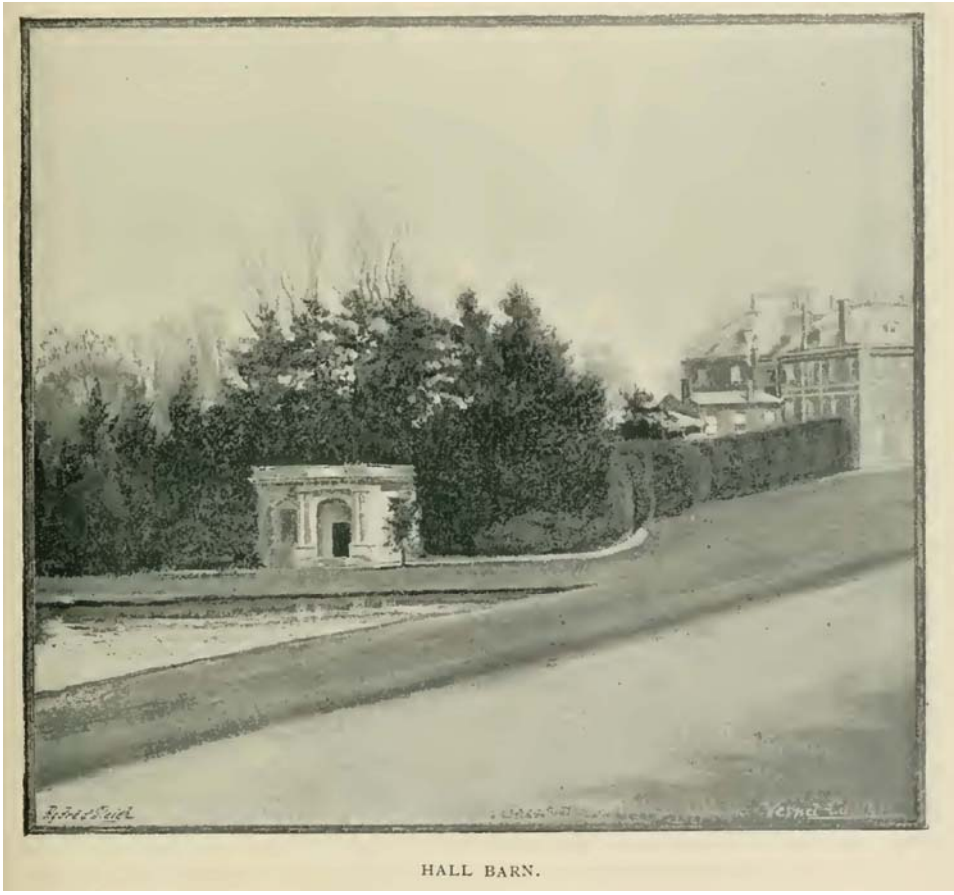
［図 11−4］　ブラマム

館は何年も前に燃えてしまい、修復されることは一度もなかったが、庭園はベンソン氏 Benson［1676 頃〜1731 年］によって造られた当時のまま、元の姿を残して維持され続けた。彼は駐スペイン大使であり、アン女王はブラマムムーアの土地を彼に下付した；彼が館を建てその周りに庭園を造った後、女王はそこを訪れ、ビングレイ卿 Lord Bingley の爵位を与えた。館に沿ってテラスがあり、その前面には芝生のパルテールがあった。そこからはブナとシデの森を通してその向こうに遠くを眺めることができた。テラスの北の端からは刈り込まれた高い生垣の間を真っすぐな園路が西に向かって延びており、そして園路がすとんと向かう先はこの上なく魅惑的な迷路で、そこからは長い園路が放射状に等角度で広がっている。それらのうち何本かの行き着く先には小さなサマーハウス、腰掛、あるいは彫像や記念碑がある。中心から一番遠い園路の端からは広々とした田園地帯越しに眺望が広がる。庭園は狩猟場より高い所に設けられ、このため二つを隔てるテラスの壁がちょうど隠れ垣根 sunk fence［眺望を損なわないように掘って作られた溝。別名ハーハーha-ha、または ha-hah。造園学用語集ではハハア］の役割を果たしている。とは言え、一番心躍る部分は多分、並木道が横にさらに広がり、園路が運河の端を巡り、高い木が静かな水面に影を落としている所であろう。「フランス風庭園」として設計されたオープンスペースがある。この場合、それは楕円形の芝生の斜面で、そこには大きな規則的な形をした花壇があり；サマーハウスがこの庭園を見下ろし、そしてサマーハウスの背後には大きなボウリング用の緑地があり、それは木で囲われ、その間を園路が通っている。楕円形の庭園の反対側の端には、水盤と「人工滝カスケード」があり、そこからちょっと離れた所で散策路は館の前のテラス

に、その南端で合流する。ブラマムのこの庭園の趣は、ある晴れた秋の日、夕日の傾く日差しの中で、木々の金褐色の葉に輝く遠景を通して現れる時、誠に美しく、決して忘れることができぬ印象を与えた。

このような庭園に関する現代における描写としてはパーシヴァル卿 Lord Percival［1683～1743 年, 初代エグモント伯爵］が義理の兄弟、ダニエル・デリングに書いた手紙の中に見出せる（*エグモント卿所有の写本)。この手紙はオックスフォードから 1724 年 8 月 9 日付けとなっている：－

「金曜の朝、ベコンズフィールド出発；我々はウォラー氏の館であるホール・バーン Hall Barn を見るため半マイル進んだ－この 7 つの窓があらゆる方角に開いている館は私がロンドン・ボックスとでも言いたくなるようなものである。彼は狩りに出かけていて、私たちは館の中に入らなかったが、これは特に珍しいことでもなく、私たちはたっぷり 1 時間半庭園を見て歩いた。このことは、彼らが私たちにヴェルサイユの庭園を思い出させてくれているのだと思えば結構なことであると言えよう。



［図 11-5］　ホール・バーン

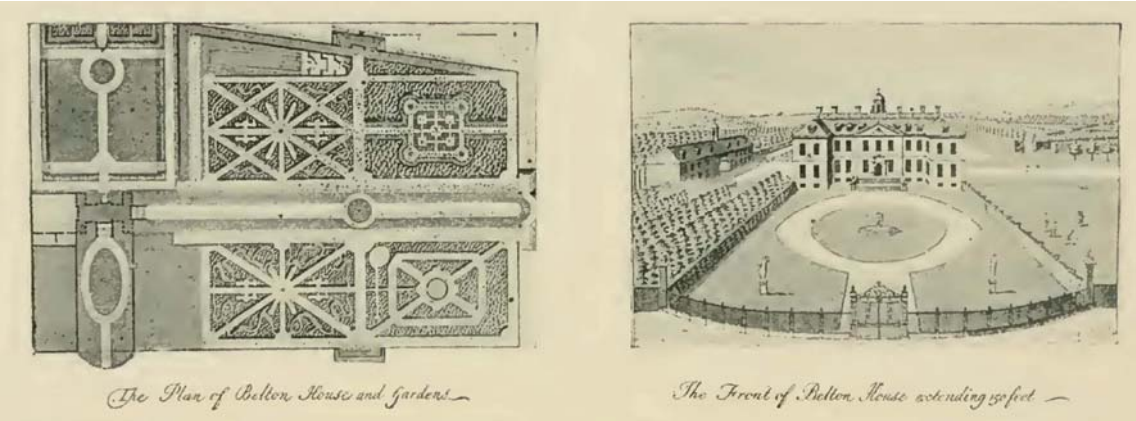
ここの庭園と森は 80 エーカーの広さだが、森は庭園の一部と思えるくらい見事に管理され

ている。パルテールからはテラスと砂利が敷かれた園路があり、それは森までそして森の中へと続いており、森の中では主要な一本道を何本かの小さな道が横切り、それらの道幅はまちまちだがすべてきれいに砂利が敷かれ、そのほとんどが両脇を緑の芝で覆われている。森は高いブナと分厚い下生え underwood で構成されており、高さは少なくとも 30 フィートはある。その中に切り開かれた狭く曲がりくねった園路と散歩道の数は数えきれないくらいである；どこから見ても健康そのもののご婦人でもすべての道を歩くことはできないので、私の妻はヴェルサイユのものと似たようなウィンザーチェアに座って運んでもらったが、だからと言って見る価値のあるものを見逃すということはまったくなかった。園路の終点はハーハーHa-hah であり、そこから先は、日の光を遮る狭い曲がりくねった園路の一番端に来るたびに、美しい田園と様々な眺めを見ることになる。ヴェルサイユは確かに噴水が優れており、ここの庭園には一つとして噴水はない：しかしここには魚が一杯いるとても気品ある水面が 2 つあり、その横は美しく植樹され段々となっている。森の中には深い底となっていて、まるでドラゴンの棲みかのようで、恐ろしい気持ちで降りて行く場所がある；しかしそこは高い木々が周りを取り囲み木陰を作っており、その木々を通して光がかすかに輝いており、それにより精気を取り戻し、ドラゴンはもっと人目につかない場所を探すだろうと正気にさせてくれる。この場所はギリシャ神話の牧羊神パンあるいはローマ神話の森の神シルウァヌスの寺院とも呼べそうな所で、そこにはいくつかの部屋、アーチ門、回廊などがあり、とても芸術的に刈り込まれた高く生い茂るイチイでできている。内側の円形あるいは中庭の真ん中、と呼んでもよいような場所には石の台座に据えられた罪深きサテュロス［ギリシャ神話で酒と女が好きな半人半獣の森の精］の像が立っている・・・ボウリング用の芝生そして館の周囲の大規模な植え込みを横切る。この植え込みはまだ日の浅いものだが、有名な詩人エドモンド・ウォラーEdmund Waller［1606～87 年］のベンチあるいは腰掛を忘れてはならない。これは今では古くなっているが非常に大切にされているので決して取り除かれることはなく、サー・フランシス・ドレーク［1543 頃～96 年］の船のように定期的に修繕されている。現在のウォラーは彼の孫である。これらすべての素晴らしい改良は彼自身あるいは岳父のエイズラビーAisleby［1670～1742 年］の手で成されたもので、岳父はこの館とその周辺の土地を、妻との合有財産 joynture の権利のもとに所有していたが、南海 the South Sea の年［訳注］に義理の息子に譲渡した。この庭園についてはまだやるべきことが多く残されており、そのための費用は巨額になると見込まれたが、この紳士は結婚により南海株と父親譲りの土地でもって好きなようにすること［ができた］」。このような魅力的な話の後に、ホール・バーンがほとんど手を加えられずにいること；また今日に至るまで詩人の名前を冠した居所が残っていることを発見することは嬉しいことである。

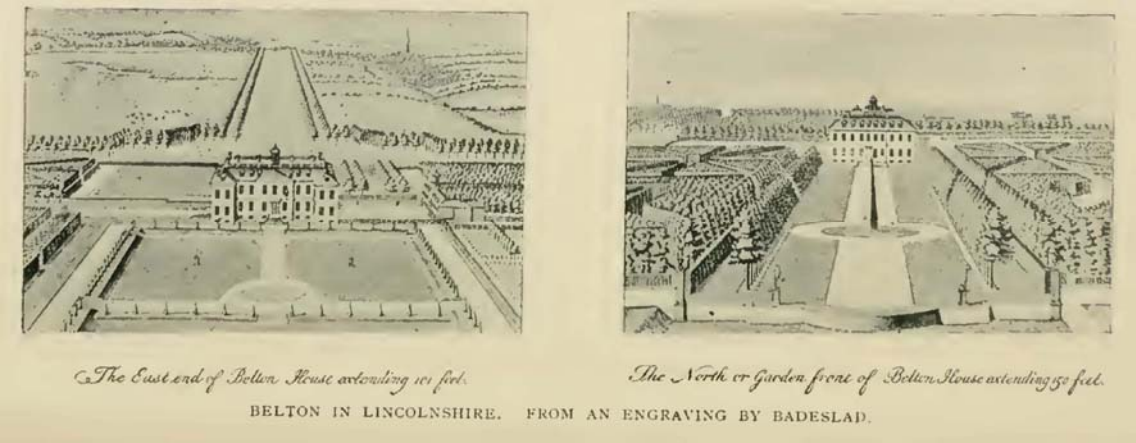
［訳注：1720 年に起きた南海会社の株価急騰と暴落による大恐慌、南海泡沫事件 the South Sea Bubble。当時造幣局長官であったニュートンは大損を被り、ヘンデルは大儲けをして王立音楽アカデミーを設立］

パーシヴァル卿は第一級の手紙の書き手であり、ダニエル・デリング宛ての数通の手紙には 1723 年にイングランドを旅した時見た庭園の印象というものが綴られている。すなわち：－「ウィッカムへと向かう、シェルバーン卿 Lord Shelburn の所まで 7 マイル［と我われは思ったが］、彼はこの時までに既にそれなりの庭園を造り、あるいは周辺の丘を覆う森の中に見事な園路を切り開いていたが、私たちはまったくもって失望させられた；森は手入れがされていない；わずか 4 エーカーばかりの庭園は趣がなくまた手入れもされていない、また館はブラックヒースのビダルフ夫人のものより 40 倍悪い」「ショットオーバーと呼ばれるティレル大佐のもの（オックスフォードの近く）は［さらに］2 マイル先にあり・・・館の周囲には森と水が豊かであり、両方とも規則正しく美しく庭園の巡回路へと導かれている。西側には大きな八角形の水盤があり、東側には運河が 2 本走っている；園路、パルテール、テラス、そして並木道が立派なオーク、ブナとニレの木の茂みで心地よく分けられている；一言で言えば、彼の庭園は既に完成しており、かつそれでも彼は自分の素晴らしい感性を満足させるために前進しているのである」。パーシヴァル卿がサー・ウィリアム・テンプルの甥の友人であったことが明らかなのは、その他の手紙の中で甥の名前をしばしば出しているからである。ムーアパークの庭園の歴史を紐解いてみることは興味深いことである。次の手紙は 1724 年 8 月 25 日付けのものである：－「ファーナムから 1 マイルの所に住んでいるジャック・テンプルを訪問・・・・そこは有名なサー・ウィリアム・テンプルに買われたもので、彼はここが大層気に入って庭園の一部を造った。ところで彼の甥であるこの紳士はそこに大きく手を加え、確かに本当に気持ちの良い居所へと変えた。ワイ川の支流という条件に恵まれ、そこから彼の庭園の真ん中に川が引き込まれ、２つの美しいカスケードに水を供給している。パルテールには若きパピリウスとその仲間のバッカス、そしてダイアナという 4 つの古い像が立っている」。

同じ年パーシヴァル卿はノーフォークとサフォークへ行った。彼はユーストンを訪れ、このように書いている：－「どの庭園もまだ注目に値するとは言えない。まだほんのできたばかりで、木も十分には育っていない。そこにはとても立派な運河があり、それが一方の端の境界となっており、砂利の園路の一番奥には大きな水盤があり、その向こうに湖がある」（*201 ページの図参照［第 9 章　図 9－3］）。そしてオックスフォード卿の場所では、「チップマン、ニューマーケットの北 3 マイル。庭園は 50 エーカーあり、とても変化に富んでおり、見事なボウリング用の芝生、遠くまで眺められる刈り込まれた極めて高い生垣の列、細長い土地と園路、そこからは立派な並木道を通して何マイルも向こうの田園地帯まで眺められる。T 字型で長さ 1000 フィート、幅 70 フィートの運河がある」。これもまたブラマムに今も存在している庭園の記述か、それともスウィツァーの計画の一つなのかもしれない。ベルトン Belton もこの時代の庭園のもう一つの魅力的な実例であり、その一部はいくらかは変更が加えられているが、これらの計画に見られるいくつかの特徴を今も備えている。



ベルトンの館と庭園の計画　　ベルトン館の正面　150 フィート上る



ベルトン館の東端　101 フィート上る　　北側あるいはベルトン館の庭園側　150 フィート上る

［図 11−6］　リンカンシャー州ベルトン　　ベイズラッドの版画より

スウィツァーはロンドンとワイズの弟子であり、庭園に関するポープのアイデアの称賛者であることを公言していた。彼の考えのすべては 1715 年の『貴族、紳士及び庭師の気晴らし』*The Nobleman's, Gentleman's and Gardener's Recreation* に書かれており、1718 年に書き加えられて『田園の設計』*Ichnographia Rustica* として再版された。「このタイトルの意味するところは、田園邸宅の一般的デザインと配置を庭園、木立ち、狩猟地、放牧地などの中に取り入れるということである。したがって著者はこれを森林式ガーデニング、あるいは簡単に、田園式ガーデニング Rural gardening と呼ぶこととする」。これこそ整形式庭園の終りの始まりであった。この「雄大な方法」"Le grand Manier"とは、彼が続けて述べるところでは「我われがどこでも見るような、癖をつけたり、小さく惨めなやり方とは対極にある方法で・・・これらのデザインの骨頂と言えば、刈り込まれた植物、花やほかのくだらない飾り・・・それは町中の小さな庭にしか似合わないもので、田園の広々とした土地にはふさわしくない」。ほかの箇所では（*1718 年編）、さらに一歩踏み込んで、彼

の仕事は「土地全体を美化すること」であると言っている。土地は「きれいに並木道や生垣で区切られ・・・小さな園路やさらさらと流れる小川・・・なぜ平らで歩きやすい砂利や砂が敷かれ木陰のもと小麦畑や牧草地を通り抜ける園路は、人が考えることができる最も荘厳な庭園の中の一番大きな園路と同じくらい楽しいことでないと言うのか？　そしてなぜ大邸宅からかなり離れた所の小さな庭園や水盤は、近くのものほど有用で目を見張らせるものではない（そして本当になぜそれ以上ではない）と言うのか？」もっとも、ここに私が引用した庭園、そして彼自身の計画は、小麦畑を含むまでには至らなかったが、庭園というものが囲まれた土地である、ということには終止符が打たれ、既に狩猟地そして周辺の田園にまで食い込みつつあった。この動きは当初は疑いなく好ましいものであり、それはオランダ式の庭園が到達した不自然な様式や硬直性をいくばくかでも捨て去ることであった。フランス式を模倣して造られた庭園には、作業が必要なスペースが広大で経費も膨大なものであったがため、大きなデザインに役立てるため、そしてできるだけ経費を節減するために周辺の自然が活用された。

それから数年後に、風景式の先駆者たちがその乱用を咎められることになるとは私は思わない；それは本当のフラワーガーデン、花が咲き誇る「この世のパラダイス」が次第に追放され、そして狩猟地に庭園が食い込んでいくのではなく、狩猟地が館の方まで押し寄せてきてフラワーガーデンがほぼ消え去った時であった。人々はあれほど長い間人気のあった「トピアリー」式に飽きつつあった。刈り込まれた垣根、小径、茂み、そして何本かの真っすぐな立木の代わりに、庭園は刈り込まれた茂みでごちゃごちゃに溢れ返っていたから、自然の美しさを知る人なら誰でも、森や野原に現れる自然を、野生のままに優美な形で手つかずで育っている木を時には見たいものだと、いずれにしろ強く望んでいたとしてもまったく不思議ではなかった。アディソンが書いたところによると（*『スペクテイター』414号　1712年6月25日 *Spectator*）、「我われ英国の庭師たちは」「自然を手なずけるのではなく、できるだけ自然から離れることを愛した。我われの木は円錐形、球形、ピラミッドの形に育てられた。すべての木と茂みにはハサミの後が見える。私は自分の意見が特異なものかどうかはわからないが、自分自身の立場からは、数学的な形に刈り込まれ整えられているよりは、大枝小枝が思いきり豊かに生い茂り形も様々な木を見る方が好ましいと思われる。そして完璧なまでのパルテールの中のすべての小さな迷路よりは、花の咲いている果樹園の方がどこまでも喜びに溢れていると想像せざるを得ないのである」。

翌年（1713年）ポープはこの自然庭園の訴えを追随する記事を『ガーディアン』に書いた。それは「緑の彫像」verdant sculpture の流儀に関し、さらに辛辣な調子で述べたものであった。「男、女、子どもたちの家族を木を刈り込んで作るという完璧な境地に到達した」「名の通った町の庭師さん」が販売用の緑のカタログをポープに送ってきたと仮定する。大変気の利いた木のリストは次のようなものである；その中には「イチイの木でできたアダムとイヴ、大きな嵐のため知恵の木が倒れて少し取り乱しているアダム；イヴと蛇、とても意気盛んな。ツゲの木でできたセントジョージ、彼の腕は十分な長さとは言えないが、

来年の 4 月までにはドラゴンを支える状態にはなっていそうなもの；同じく緑のドラゴンでカキドオシ ground-ivy の尾が今のところ付いている（注意－これら 2 つは別々には販売されない)。月桂樹でできた様々な著名な近代の詩人、少し枯れかけていて安く処分されそう。ヤマアラシ porcupine［古フランス語 porc 豚＋espin とげのある］になってしまった豚の形の生垣、雨天の中 1 週間放置された［枝が伸びた］ため」。以上の話が記述されている随筆の頭の方で、ポープはホメロスの『オデュッセイア』に描かれているアルキノオス Alcinous の庭園の描写を引用し、その一節を自ら翻訳し掲載している。

［訳注：アルキノオスはパイアケス人の王で、難破したオデュセウスから放浪の話を聞いた］

	（仮訳）
“Close to the gates a spacious garden lies,	門の近くにはゆったりとした庭園が広がる
From storms defended and inclement skies;	嵐から守られ、そして風雨が吹きすさぶ空；
Four acres was the allotted space of ground,	4 エーカーが割り当てられた土地の範囲
Fenc’d with a green inclosure all around.	周りはすべて緑の垣で囲いがめぐらされ
Tall thriving trees confess the fruitful mold,	高く元気な木々は実り豊かな姿を見せ
The red’ning apple ripens here to gold.	赤くなったリンゴはここで金色へと熟す
＊　＊　＊　＊	＊　＊　＊　＊
Beds of all various herbs, for ever green,	あらゆる種類のハーブの畑は、いつも青々と
In beauteous order terminate the scene.”	美しい整然とした姿で一画をなす

仮にこのようなものがポープの理想的な庭園であるなら、彼があれほど熱心に持ち込むことを支援した風景式とはほとんど共通点はないことになる。「この単純さに比べると現代のガーデニングの手法は何と正反対にあるものか！」と彼は続ける。「自然から距離を置くこと、すなわち最も規則的で整形的な姿に木をいろんな刈り込む時だけでなく、技術の限界を超える途方もない試みにおいてすら、これを我われは目標にしているように思える。我われは彫像に出くわし、そしてなお、木々が人間や動物の最も本来の形であるよりも、その最もぎこちない姿になっている方を喜んでいる」。整形式庭園の一番熱心な推進者であったとしても、ポープとアディソン側に言い分があることは誰も否定できない。とは言え、もう一方の極端に走って、庭園の中に計画性がまったくなく、いかなる直線もまったくないなどというようなことはありえない。ポープがトゥイッケナムに落ち着いて 2 年後、そこの邸宅は彼が称賛する単純なスタイルとはかけ離れたもので、あらゆる種類の田園風景の模倣が複雑に絡み合った代物であった。彼は計画と植栽に天井知らずとも言える労力を注入した。「私は神に感謝します」と友だちへの手紙に書いた。「すべての雨の日、そしてすべての霧に対し、それが私の頭痛の原因だが、私の仕事は捗っている」。彼の有名な洞窟は、「大理石、スパーspars［方解石、蛍石など］、宝石、金や鉱物でできており」、彼の晩年のお楽しみであった。それは間違っても「自然」であるとは認められないが、それはこれ以

上夢のようなものは想像できないからである。もっともこの洞窟についてポープ自身が書いたところでは、彼は初めての人にこうするように言っている：－「近づくのだ！偉大な自然をじっくり見るのだ」

［図 11−7］　ストウのパラディオ様式の橋

アディソンは一時、ウォーリックシャー州ビルトンに住んでおり、そこの彼の庭園も「自然式」とは言えないものである。その庭園の一部は 1623 年に遡る；その何箇所かは今世紀初期に手が加えられたが、アディソンによって使われたあずまやは今もなおそこにある。建物は古典的な「アン女王」スタイルの建築様式で、そこには真っすぐなベンチがあり、庭園を眺めるようになっており、そして田園的なものは何もなかった。それでもなお、庭園の中には古い刈り込まれたイチイのあずまやが 2 つあり、またきれいなイチイとセイヨウヒイラギの生垣もある。

この時代の別のデザイナーであったブリッジマンは、これら二人の著作家の考え方を踏襲したが、彼自身はスウィツァーのような物書きではなかったから、彼の考え方というものは、彼のした仕事を見なければわからない。ウォルポール Walpole［1717～97 年］は何年か後に、ブリッジマンのことを高く評価して書いている。彼は王立庭園の責任者としてロンドンとワイズの後継者であり、前任者たちより「はるかに高潔」であったとウォルポールは書いている。「彼は計画を拡大し、すべての部分 division tally を正反対にすることを嫌い、そして高く刈り込まれた生垣が配置された真っすぐな園路に、彼はまだ多くの愛着

を持っていたが、それは大きな線だけに限られ；残りはわざと手を入れないで多様性を加え、また囲われた生垣の内側ではあったがオークのぼさぼさっとした茂みを作った。ハートフォードシャー州ガビンズの、故サー・ジェレミイ・サムブルック Sir Jeremy Sambrooke［1703 頃～40 年］の居所の庭園の中で、私は多くの点について一歩距離を置いた思考様式、すなわち現代的な趣向の夜明けを強く示す考えを観察したところであった。ブリッジマンの改革がその地歩を固めるにつれ、彼はさらに大胆となり、リッチモンドの王室庭園の中に耕作地を取り入れ、加えて森の風情のかけらすら持ち込んだのである。もっともこれは、厳格な対称性から解き放つ別の革新者たちが新たに出現してからのことであった」。

風景式造園家 landscape-gardeners の何人かの名前はバッキンガムシャー州のストウ Stow との関連で知られており、それぞれの人物が代わるがわるこの場所に何かしらかのものを付け加えた。 この流派の庭園デザイナーたちによって、庭園は完璧さの極致そのものと見られるようになった。風景式庭園の諸原則に関するポープの記述はたった一つの言葉にまとめられる、それはストウ：－

	（仮訳）
"Still follow Sense, of ev'ry art the soul,	さらに感覚に従い、すべての人為の本質
Parts answ'ring parts shall slide into a whole;	部分が答えであり、部分が全体の中に滑り込む
Spontaneous beauties all around advance,	自然に生まれる美しさがすべてに行き渡り
Start ev'n from difficulty, strike from chance,	困難ですら始まりとなり、偶然から生み出す
Nature shall join you; time shall make it grow,	自然があなたと結ばれ；時がそれを育てよう
A work to wonder at – perhaps a STOW."	驚くべき仕事－多分それはストウ

サー・リチャード・テンプル Sir Richard Temple［1634～97 年］は 1697 年に亡くなったが、彼はストウの館の再建を始め、そしてその息子のコブム卿 Lord Cobham はそれを引き継ぎ、さらに庭園を造り始め、それは 1755 年までずっと手が加えられ続けた。その頃までには 500 エーカーの大きさにまで広がっていた。ブリッジマンが最初のデザイナーで、その後はケント Kent［1686～1748 年］であり、その間、サー・ジョン・ヴァンブラ Sir John Vanbrugh［1664～1726 年］により寺院、記念碑のいくつかが建設された。ストウについての数限りない描写の中から一つ、彼が実施した最後のデザインとしてピラミッドが特に触れられている（*『ストウ　リチャード閣下コブム子爵卿の庭園』1732 年 匿名 *Stow. The Garden of the Rt. Hon. Richard, Lord Viscount Cobham*）：－

	（仮訳）
"・・・・・ascends	・・・上る
The pointed pyramid; this, too, is thine	先の尖ったピラミッドへ；これもまた汝の
Lamented Vanbrugh! this thy last design,	惜しまれるヴァンブラ！これは汝の最後のデザイン
Among the various structures, that around,	数々の構造の中で、その周りに
Formed by thy hand adorn this happy ground."	汝の手で形作られこの幸せの大地を称える

この庭園は当時の理想的な庭園であったため、今もこれに関するガイドや記述がいくつか公刊されている。より小さなものもこの真似をし、同じように寺院や庭園、眺望を寄せ集めているので；それらの特徴について詳しくおさらいをしておく必要があろうかと思い、あの心はずむ手紙の書き手であるパーシヴァル卿から義兄弟のデリングに宛てた手紙を余すところなく書き写してみた。そこには 1724 年に彼がその庭園を訪問した時の彼自身の印象が綴られている：（†エグモント卿所有の写本　セントジェームズプレースにて）

「ブラックリー　1724 年 8 月 14 日　金曜日夜
7 時

「親愛なるダニエル

昨日我われはコブム卿の館を拝見しました。この館は最近 5 年の間にイングランド一番素晴らしい居所であるとの名声を博するようになりました・・・庭園は園路の巧みな仕掛けにより実際より 3 倍広いように思われます。たったの 28 エーカーなのに 2 時間もかかりました。庭園は完全に新しく、ほんの 11 年前に改造が始まったのに今やほぼ完成しています。下の方の端から多数の階段（ただしいくらか距離があって）をパルテールまで上って、そこから館までもう少し上る、そこに堂々と立っており見事な眺めを楽しめる。26 マイル先まで見える。この庭園について正確にその姿をお伝えすることは不可能だが、その様子を手短に言うとこんな具合である。サマーハウスのところで終わる何本もの園路があり、そして様々な構造をした異教徒の寺院、それは風変わりな模様から作られた彫像で飾られている。ここにはアポロの神殿、そこには凱旋門。ヴィーナスの庭園は心をはずませる；彼女は自分の神殿の中に立っており、そこは水をたたえた上品な水盤の頭のあたりで、その反対側には神々や女神の像を備えた円形劇場がある；この水盤は園路と茂みに囲まれており、相当の高さからコンポジット式の高い柱により見下ろされている。その柱の上には礼服に身を包むジョージ皇太子の彫像が立っている。館から延びる砂利の園路の端には、2¼エーカーの広さの水面に丸く囲まれた異教徒の 2 つの寺院がある。その真ん中には Gulio すなわちピラミッドがあり、その高さは少なくとも 50 フィート、その頂上からは中を通したパイプにより運ばれた水が流れ落ちるように設計されている。この園路の半ばにはもう一つの見事な水盤があり、その中には高さ 30 フィートのピラミッドが建っていて、館に近い方には 40 フィートも噴き上げる噴水がある。交差する園路の終点は遠景の中、門のアーチ、彫像へと続き、また茂みを切り開いた秘密の園路は心地よい。もう見るものはないと 20 回思い、そして今見終わって称賛し立ち去った庭園なのに、突然、新しい庭園や園路にいる自分を発見する。全体としてこれほど不規則なものはなく、部分においてこれほど規則的なものはない、一つのものは別のものとまったく違うものとなっている。これは神の素晴らしき趣味を示しており、また神のこの場所への愛着がその注ぎ込んだ努力により出現している。趣味のよい庭園を造ることがどれほど責任の大きいことか誰もが知っている；突然それを造ることはなおさらである；しかしながら、このほど多くのサマー

ハウス、寺院、柱、ピラミッド、そして彫像、大半は見事な切り出された石で、残りは金箔を施された鉛は大金持ちの財布をも使い果たすであろうし、彼の妻の莫大な財産の大半もその中へと沈んでいったであろうと疑わざるを得ない。園路のうちの 1 本の端にあるピラミッドはエジプトで最も有名なもののミニチュアの模倣で、イングランドではこの種の唯一のものだと思う。ブリッジマン*が敷地の設計をし、全体の計画も作成したことで、彼はこのビジネスで間違いなく名声を得ることになった。

*余白にある註釈：－「ブリッジマン氏はその後国王の主任庭師へと任命された」

この庭園に美しさを増すことになったのは、庭園が壁で仕切られることなく、ハーハーで仕切られたので、美しい森の田園地帯を眺めることができるようになり、高く植樹された園路がどこまで続くのか気にしなくてよくなったのである。

かくて庭園はハーハーにより狩猟地の中に溶け込みつつあった。多くの場合、実際に造られた庭園は、狩猟地の中により大規模な庭園を造るために疎かにされた。バウトンにおける変更、それはジョージ 1 世の治世下［在位 1714~27 年］であったが、それは当時の典型的なものであった；すなわち、広範囲にわたる水の修景施設は取り払われ、手が入れられない部分が広げられ、何マイルにもわたる並木道に木が植えられた。

「誰がバサースト Bathurst［1684～1775 年］の庭園のように植栽するか」とポープは書いた。ポープは植栽についての流行のリーダーであったから、バサーストにおける手法は当時の特徴であったと言えよう。サイレンセスターで彼が植栽を施したのは庭園ではなく狩猟地であり、そこには何マイルもの並木道が巧みに計画され、しかも館からは遠く離れ、小さな庭園からはほんの少し見えるだけであった。ポープが過ごし植栽の美しさを楽しんだサマーハウスは、館から 1 マイル以上も離れたところで 7 本の並木道が分かれる場所であった。さらに眺めの良いポイントは、そこからさらに 2 マイル離れた 10 本の並木道が集まるところであった。同じ発想はバドミントン Badminton でも実行され、そこでは何本もの並木道が田園地帯へと何マイルも続き、遠くの一点で交わった*。これは庭園の範疇をはるかに越えており、したがって私の主題の範疇も越えているが、ウォルポールによると「ケントが垣根を飛び越え、すべての自然が庭園であると見た」という時代に到達した今、その広がりに少し触れざるを得ないのである。

*キップの意見を参照、ブロムフィールドとトーマスに『整形式庭園』*Formal Garden* に復刻されている。

花を愛する人々にとって、庭園と言えばそれはいつも庭園なのである。彼らの保護の下、園芸と植物学は着実に進歩を遂げ、それは庭園を狩猟地と一体化しようとする新しい熱狂にも負けなかった。ガーデニングの実用的な分野で働いた人々の数は多い。リチャード・ブラッドリー、フィリップ・ミラー、トーマス・フェアチャイルド［1667～1729 年］、そしてジョン・ローレンス［1668～1752 年］はその中でも一番有名な人々であった。ブラッドリーは自然史、ガーデニングおよび植物学に関する膨大な著作を残した。彼は植物の成長、

樹液の移動、受精に関する様々な問題に取り組んだ。「植物の樹液は動物の体内の体液と同様に循環する」と書いた。受粉に関しては「パリの紳士とサミュエル・モーランド氏 Samuel Moreland から多くのヒント・・・どのようにして花粉（すなわち雄しべの花粉）が子房の中の胚珠を受精させるか」を得たと言っている。おそらくこの「パリの紳士」とはセバスチャン・ヴァイヤン Sebastien Vaillant（1669–1722 年）と思われる。彼はこのテーマについて書いており、グルー博士およびトーマス・ミドルトン、レイ Ray ほかによって初めて提起された植物の生殖に関する理論について賛意を表していた。サミュエル・モーランドは1703年学士院向けに論文を書いた;彼の理論は、花粉が子房に達するプロセスにおいて、ほかの人とほんの少しだけ異なっていた。科学者たちは自分の理論を証明するために植物を使って実験をし、それを現場の庭師が躊躇なく手伝った。その自然な成り行きとして、ほどなくよく知られている品種の改良や種類を増やすことに成功した。ブラッドリーは品種の交配 cross fertilization の例を示して、たとえば、プリムラ＝アウリキュラやチューリップの色を変えたり、またフェアチャイルドの庭園の中のある植物がカーネーションの種にアメリカナデシコ Sweet William の花粉を受精させて育てたものであることを見せた。

ホクストンにあるフェアチャイルドの庭園は多くの実験が行われる場所となった。ブラッドリーはしばしば彼のことを、自分が知っている中で技術的に最も優れた庭園師であると語っている。フェアチャイルドは『都市の庭師』*The City Gardner* の著者である。この著作には常緑樹、木や花のリストが載っており、これらは「ロンドンの庭でも一番よく育つであろう」とされるが、それは「石炭の煙のせいで・・・何でもが育つわけではないからである。しかし・・・」と続き「私が見るところ、仕事上、年がら年中、町中にいなければならないほとんどの人々が庭らしきものをとにもかくにも持つだろうということがわかる。一般の市民の人たちがガーデニングのことを広く愛好していると想像でき、自分の部屋や寝室を花を生けた水盤や大枝を入れた壺で飾るのを見ると、たとえ目の前に庭らしきものがなくてもそう思われるのである」。この本の中で、当時（1722 年）ロンドンの様々な場所で元気に育っている何種類かの木について書き留められている；トキワガシ ilex、レダマ Spanish broom、カンボク guelder rose、ハシドイ、ライラックはソーホー広場に；梨の木はバービカン、オールダースゲート、ビショップスゲート辺りの何本かの「特定の小路」に見られる。美味しそうな実をつけているブドウの木はレスター広場に；イチジクはチャンセリーレインのロール庭園 Roll's Garden とクリップルゲートのベネット博士の家に見られる；リョウブ類 lily of the valley［tree］はギルドホールの背後の狭い場所に；プラタナスは「東の聖ダンスタン」通り沿いに、高さ 40 フィート以上もあり、このほかにもウェストミンスターと「川の近くのロンドン各所」では、あらゆる数々の植物が完璧な姿で育っているのを見ることができる。あまりにもたくさんの珍しい植物をこの情熱的な庭園師はホクストンの自分自身の庭園で育てていたので、正しく世話をすればほとんどあらゆるものが町中で育つであろうと思っていたようである。そのリストの締めくくりに「オリーブだってロンドンで上手に育つであろうと説得されそうになる」と彼は言っている。

フェアチャイルドの名前は彼が住んでいたロンドン内の地区では今でも記憶されている。「フェアチャイルド講演会」は彼の残した遺産に従い、毎年ショアディッチのセントレナード教会で開催されている。聖霊降臨祭［復活祭後第 7 日曜日］の翌々日の火曜日 Whit-Tuesday で話される説教のテーマは「創造における神の素晴らしい業」または「死せる者の復活の疑いのない事実について、創造における動物および植物の分野で変化するものがあることで証明されている事実」のいずれかである。ロンドン主教により任命される説教師は説教壇から創設者の考え方を今も述べることになっている。

フェアチャイルドは庭園師協会 Society of Gardeners の会員であり、そのリーダー的役割を果たしていたようで、それは彼の名前がフェアチャイルドの死後彼らにより出版された本の序文の最後に掲げられているメンバーのリストの一番最初に出ていることでわかる*。この本はとても興味深いものの一つである。その一部だけが出版され、もしそれが十分に好評であれば残りも出版される予定であったが、そうでなかったことがとても残念に思われる。次に掲げる庭園師たちが共著者であった人物である：－

トーマス・フェアチャイルド	Thomas Fairchild	ジョージ・シングルトン	George Singleton
ロバート・ファーバー	Robert Furber	トーマス・ビッカースタッフ	Thomas Bickerstaff
ジョン・アルストン	John Alston	ウィリアム・フード	William Hood
オバダイア・ロウ	Obadiah Lowe	リチャード・コール	Richard Cole
フィリップ・ミラー	Philip Miller	ウィリアム・ウェルステッド	William Welstead
ジョン・トンプソン	John Thompson	ベンジャミン・ウィットミル	Benjamin Whitmill
クリストファー・グレイ	Christopher Gray	サミュエル・ハント	Samuel Hunt
フランシス・ハント	Francis Hunt	ジョン・ジェイムズ	John James
サミュエル・ドライバー	Samuel Driver	スティーヴン・ベーコン	Stephen Bacon
モーゼス・ジェームズ	Moses James	ウィリアム・スペンサー	William Spencer

*『植物カタログ 樹木、低木等のカタログ：ロンドン近辺の庭園の販売用』庭園師協会発行 1730 年 *Catalogus Plantarum. A catalogue of Trees, Shrubs, Etc：for sale in the Gardens near London* 大英博物館の本はフェアチャイルドの名前となっている。452, h.2.

［図 11−8］庭園師協会のカタログの扉　1730 年

これらの人たちの大半は種苗園の庭園師であり、全員ロンドン市内あるいは郊外に住んでいた；ーアルストン、ミラーとトンプソンはチェルシーに；ロウとコールはバターシィーに；フェアチャイルド、ウィットミルとベーコンはホクストンに；フランシスとサミュエル・ハントはプットニーに；グレイはフラムに*、ジェームズはランベスに、ジョージ・シングルトンはニートハウスに；そしてウィリアム・フードはハイドパークコーナー近くのウィートシーフに。

*タイサンボク magnolia grandiflora が最初に植えられたのはグレイの庭園であった。ジョンソンの『イングリッシュガーデニングの歴史』202 ページ参照

毎月、5、6 年の間、この協会はチェルシーにあるニューホールのコーヒーハウスや別の便利な場所で会合を開いた。各会員が自分が育てている植物を持って来て、それについて集まった庭園師で議論をした。それらの名前と外見の様子が丁寧に登録された。5、6 年経った最後に、彼らがカタログ化した全部の植物について「絵の上手な人に描いてもらって色を付けて」もらうことを決定した。この目的のため、ヤコブ・ファン・ホイズァム Jacob van Huysum［1688～1740 年］と契約した；彼は優れた画家で、花を描く有名なオランダの画家の弟であった。彼らは膨大な絵のコレクションを一堂に会し、最後はそれを出版することで合意した。耐寒性の灌木を掲載している最初の部分だけが出版された。続編としてより弱い外国の植物、そして「愉楽の庭園のための花」、また果樹に関する部分が出版される予定であった。この今我われが目にする、出版された部分からわかる重要な価値というものは、同じ植物についてすべての異名 synonyms について記述し、また過去の多くの著作家たちについてそれぞれの植物を同定するために述べ、さらにいくつかの新しい品種についてそれが持ち込まれた歴史について示している；スイカズラについての専門的記述は数ページを占めておりとても価値が高いものである。またロンドンのいくつかの有名な庭園に植えられている樹木の見事な標本についても触れている。以下はその一例である、サービスツリーservice trees（＝*Pyrus Sorbus*）［ナナカマドの仲間、現学名 *Sorbus Domestica*］：「かつてはサウスランベスのジョン・トラデスカントの所有であった庭園には、そして希少で普通には見られない樹木の風変わりな収集家であるハンマースミスのマーシュ氏の庭園にも同様に、この両方の場所には、毎年大量の果樹、完全に熟しているものを生産しているこれらの樹木がある」。ここにも「アメリカサイカチ Three Thorned Acacia、別名ハニーロウカスト Locust Tree」（＝*Gleditschia triacanthos*）の描写に対して注釈が加えられており、「本年 1729 年、フラムのロンドン主教の庭園にてさやの実をつけた」とある。博物学者のケイツビーCatesby［1682～1749 年］のことも、何種類かの植物を持ち込んだ人物としてしばしばこれらのページの中で言及されている。以下はその中のものである：ー「アメリカビグノウニア」Bignonia Americana［ノウゼンカズラ科］，キササゲ Catalpa は 1730 年にイングランドでは花が咲かなかった；黄色の実をつけるサンザシ（＝*Crataegus flava*）はカロライナから 1724 年に送られてきた；カロライナトネリコ Carolina ash（＝*Fraxinus*

caroliniana）は「ケイツビー氏により種から育てられサウスカロライナから 1724 年に送られてきた；カロライナシナノキ Tilia Caroliniana（＝*T. americana*）は 1726 年に；カロライナインゲン豆の木［アメリカフジ］（＝*Wistaria frutescens*）は 1724 年に、この花がようやく咲いたのは（1730 年で）ロバート・ファーバーのケンジントンの庭園においてであった；緋色の花を咲かせるアカシアと「ウォーターアカシア」Water Acacia［棘のないアメリカサイカチ］（＝*Gleditschia triacanthos inermis*）、この両者は 1723 年に本国に送られた。

マーク・ケイツビーは著名な博物学者であった。彼は最初ヴァージニアで収集活動を行い［1712～19 年、いったん帰国したが］、科学の大義のためにアメリカに戻ってさらに収集活動をすることをサー・ハンス・スローンなどに勧められたので、ふたたび 6 年から 7 年間アメリカに渡り、その滞在期間中に折を見ては種を本国に送った。1726 年帰国するや、彼の偉大なる著作である『カロナイナ、フロリダおよびバハマ諸島における自然史』*Natural History of Carolina, Florida and the Bahama Islands* に取り掛かり、その最初の部分が 1731 年に出版された。ケイツベーア *Catesbaea* 属、すなわち lily-thorn［アカネ科でユリのような花を有する］は彼にちなんで、同時代のオランダの博物学者グロノヴィウス Gronovius［1690～1762 年］により名付けられた。

この庭園師協会の最も名高い会員はフィリップ・ミラーであり、彼はチェルシー薬草園の管理人で、かつ広く知られている庭園師事典 Gardener's Dictionary の著者であった。この本の初版は 1731 年に出版され、大変人気があったので第 7 版が 1759 年に出て、オランダ語、ドイツ語、フランス語に翻訳された。版を追うごとに科学としての植物学の進展の状況と外国の植物の数が膨大に増加していることがわかる。第 7 版においてミラーはリンネの分類法を採用している。ミラーがこの偉大なスウェーデン人の知己を得たのは、彼が 1736 年にイングランドを訪問した時であった。リンネの最初の偉大な業績、すなわち分類に革命をもたらした『植物の属』*Genera Plantarum* が世に出たのはその翌年のことであった。ミラーは彼の行った仕事に大変向いていた人物であった；彼は実務的であるとともに科学的であった；彼は初めトゥルネフォール Tournefort［1656～1708 年］の分類法、次いでレイの分類法に従ったが、学識が十分深かったのと時代の流れと歩む見通しの良さを備えていたので、リンネの改良された学名を採用した。流入が続く新しい植物の量が多かったので上手に育てることが必要とされただけでなく、注意深く並べて分類することが求められ、フィリップ・ミラーはその両方について多大な貢献をした。

植物はアメリカから持ち込まれただけでなく、新しい宝物はイングランドを目指して旧世界の他の地域からもやって来た。ウィリアム・シェラード William Sherard［1659～1728 年］は学識深い植物学者でレイやスローンの友人であり、ケイツビーの支援者であった。彼は 1702 年にスミルナ［現在のトルコのイズミール］の領事に任命され、1718 年までそこに滞在している間、ギリシャや小アジアの植物の収集にほとんどの時間を費やした。彼の弟のジェームズはケントのエルタムに有名な庭園を所有しており、ウィリアムが送って来る新

しい珍しい植物を数多く栽培した。外国からの持ち込みに加え、国内の庭園師たちは交配実験や、二重咲き品種、特に斑入り variegation の植物を創り出すことにより栽培植物の数を増やしていた。
斑入りの「銀の縞入り」または「金のまだら」のライラック、ハシドイ、セイヨウイボタ、フィリリア phillyrea やカエデ類などは大変な人気を博した。

温室と暖房温室の暖房、建築方法が改善したことで「か弱い外来植物」を保護したり果物を育てることが可能となったばかりでなく、野菜の促成栽培が可能となった。ブドウの促成栽培も試みられ、ベルヴォワールのラトランド公爵により実験が行われた。ブラッドリーとスウィツァーはその手順について「壁の背後からある程度離れたところにかまどを作り、そして 1 月から日光の力が十分に強くなるまで壁を温め続ける、日光の力が強くなれば壁に向かって植物が成長を維持できる・・・壁の横では最新の品種のブドウが 7 月か 8 月頃には普通に熟すことになる」と記している。ブラッドリーは一点、現代的なブドウ畑に必要なもう一歩進んだ注意事項について「気をつけなければならないのは、寒い季節の間、これらの果物が季節外れに促成で発芽させる時には、植物は霜による被害のおそれを防ぐためにガラスで覆われなくてはならない」（*ブラッドリー『自然の営み』1721 年 *Works of Nature*）と付け加えている。リバプール近くのノウズリーホール Knowsley Hall にあるダービー卿のところでは、早生のブドウを収穫するために壁を温める別の手法があり、旅行者により 1732 年、次のように記されている：－「ここのブドウのための熱い壁は、中に空洞が設けられ、と言うか 2 枚の壁が平行して走って両端で閉じられていると言ってもよいが、そこに石炭をくべるストーブがあって壁の中間に煙突がある；毎晩火がつけられる」*。
*『旅行日記』1732 年 著者キャバシャムのジョン・ラヴデイ *Diary of a Tour*, by *John Loveday of Caversham* 彼の孫による編纂 ロクスバラクラブ 1890 年
［訳注：ロクスバラクラブ Roxburghe Club は 1812 年設立、愛書家のクラブで会員数は 40 名限定］

フィリップ・ミラーによるアプリコットとサクランボの促成栽培の方法は、板でできた衝立の南面に木を釘付けし、前方はガラスで覆い、板の後ろには温床を積み上げるというやり方である。

ローズはイングランドでパイナップルを育て、それをチャールズ 2 世に献上したと言われるが、それは何年もの間ユニークな手本となり誰も真似できない偉業であり続けた。この時代に至るまでパイナップルの栽培ということは理解されなかった。ヘンリー・テレンデはリッチモンドのサー・マシュー・デッカーSir Matthew Decker［1679～1749 年］の庭師であり、「我われの気候で楽しむためにアナナスすなわちパイナップル」を初めて持ち込んだ人物であった（†ブラッドリー『植物事典』1728 年 *Dictionarium Botanicum*）。ほどなく何人かの栽培者がパインに目を付け 50 年以内にその栽培だけのことを書いた本が売られるようになった‡。
‡『アナナス パイナップルに関する論稿』ジョン・ジャイル著 1767 年 *Ananas, a Treatise on the Pine*

Apple, by John Giles,　『アナナスに関する論稿』アダム・テイラー著 *A Treaties on the Anana*, by Adam Taylor,　『パイナップルに関する論稿』W.スピーチリー著 1779 年 *Treatise on the Pine Apple,* by W. Speechley

ホクストンのフェアチャイルドとブレントフォードのグリーンが所有していた果樹園は、果樹園の中でも最も優れた二つであり、特に後者のイチジクは極め付けに最高だった。しかし、もっと特別に大きな進展が図られたのは野菜栽培であった。過去においても長らくイングランドでは野菜は十分に供給されてきた；しかし、何か特別な時、あるいは早めにとか、季節外れの時に、大きなお祝いごとの時に必要になったら、海外から、主にオランダから輸入することになった、しかし起業意欲のある庭師たちは、18 世紀初頭には青物野菜とサラダ用野菜、アスパラガス、キュウリの促成栽培を試し始めた。冬に収穫するためキュウリを秋に育てることを最初に始めたのはファウラーで、彼はストーク・ニューイントンのサー・ナサニエル・グールド Sir N. Gould［1661～1728 年］の庭園師を務めていた。彼は 1721 年の正月にジョージ 1 世に見事なキュウリ 2 本を献上した。サミュエル・コリンズは 1717 年にメロンとキュウリの栽培について論文を書き、保護のために必要な様々なガラスやフレームを提案した。以下、ブラッドリーからの引用で、そこには初期の促成栽培の先駆者の何人かの名前が示されている：－「健全な農産物および各種のハーブを供給するキッチンガーデンでヨーロッパのいかなる菜園 gardens よりも早い一番乗りは、ウェストミンスター、タトルフィールズ近くのニートハウスの菜園で、そこはサラダ用の早生のキュウリ、カリフラワー、メロン、冬アスパラガス、そして食卓に合ったほとんどあらゆるハーブが豊富であった；そして私が思うに、ここほど料理用の庭づくりを行う庭師にとって素晴らしい学校はない；もっともバタシーは最大規模の地穫りアスパラガスと一番早いキャベツを供給するが。またハンマースミス周辺の菜園に戻ると、そこはイチゴ、ラズベリー、カラント、グーズベリーなどの類で有名である；そして早生の果物をお望みなら同じ近くのノースエンドのミラー氏の菜園がサクランボ、アプリコット、その他同じように珍しいものを、普通の季節よりも数カ月早く提供してくれる」。ロンドン近辺のもう一人の優良な種苗業者はチズウィックのニコラス・パーカーであった。彼はローレンスが強く勧める人物で、同業者の中でこれ以上の人はいないと、その「誠実さ、手腕と高潔さ」によってすべての人に知られていた。同業者たちはともすると騙したり、お客さんが注文したものの代わりに劣った品種の果物を送り出したりしがちであった。たとえば、「元祖ニューイントンピーチ」の代わりに「乾燥して鮮度の落ちたネクタリンであったり、あるいは芳醇なフレンチペアの代わりに砂のようなチョークペア choak-pear やウォーデン梨であった」（*『聖職者の気晴らし』ジョン・ローレンス　ノーザンプトンシャー州イェルヴァートフトの教区牧師 *The Clergyman's Recreation.*）。

スウェーデンの偉大な園芸家であったカルム Kalm［1716～79 年］、彼にちなんでカルミ

ア属が命名されたが、彼が 1748 年アメリカに行く途中にイングランドに立ち寄った時、市場向け菜園 market-gardens と早期栽培の野菜を見て衝撃を受けたと言われる。彼が記録したところによると、菜園の苗床は盛り土になっており、太陽に向かって少し傾斜がつけられ、 「その多くはこの時期（2 月）ガラスフレームで覆われており、それは好きな時に取り外せるようになっていた・・・これらの上にはロシア式マット Russian matting で覆われ、その上に 4 インチの厚さで藁が敷かれた。これらによりカリフラワーが 4 インチの高さで包まれた。残りの平地では「鐘型ガラス器」bell-glasses が置いてあり、それぞれの下にカリフラワーの苗が 3 から 4 本植えられていた。前述した苗床の横にはアスパラガスの細長い苗床があった。それらの高さは地上 2 フィート；その頭にはガラス、マット、藁によって同じように覆われており、日中はこれらの覆いはすべて取り払われていた。覆いの下のアスパラガスは高さ 1 フィートでかなり太くなっていた」（†『カルムのイングランド訪問』*Kalm's Visit to England* 翻訳はジョゼフ・ルーカス Joseph Lucas1892 年）。ダイコンも同じ菜園で栽培されており、苗床はマットで覆われていた。彼によると、5 月になるとロンドン周辺では野菜は大量に出回り、それらは豆、エンドウ豆、いろんな種類のキャベツ、ネギ、チャイブ、ダイコン、レタス（サラダ用）、アスパラガス、ほうれん草であった。チェルシーについては「そこには果樹園か野菜の市場向け菜園、そして販売用のあらゆる種類の幼木が一杯に植えられている大規模な平地以外のものはほとんどない」と書いている。

このように野菜栽培の分野で大きな進歩が見られたことがわかるであろう。しかしながら、いくつかの点においては、庭師たちは依然として極めて原始的なアイデアしか持ち合わせていなかった。1729 年、1 本のアロエ（*Agave*）が「ホクストンのカウエル氏の庭園」で花を咲かせた時、どのようにして冬を過ごさせたらよいかをめぐり大きな興奮が巻き起こった*。その植物の背丈はその時点で 20 フィート、それを覆うものが木材とガラスで建てられ、外側にはストーブを置いてパイプによって「適量の熱」を注ぎ込み、さらに「予想外にこの有名な植物が成長」した時に対応できるように、必要ならばその構造物を高くできるような準備もされた。ところが、間もなくこの花だけでなくこの植物全体がほとんど枯れてしまうことになってしまい、このようなすべての配慮と経費がほとんど役に立たなかったと分かった時、彼らの失望たるや如何ばかりかと思われる。

*『ホクストンのカウエル氏の庭園で今、花を咲かせているアメリカアロエまたはアフリカアロエに関する正しい説明・・・それと同じものはイングランドでは今まで一度も見られたことがない』1729 年

これらの市場向け菜園で作られた野菜の大半はロンドン市内の道端で売りさばかれた。手押し車の行商人たちのいろんな呼び声 cries はロンドン生活の際立った風物であった。この絶え間ないコーラスの数多い繰り返しの中の一つがアディソン（†『スペクテイター』251）によって記憶に留められ、こう書いた：－「私は 1 年の中でディル dill［イノンド　伝統的なハーブの一種］とキュウリを収穫するのにふさわしい、その決まった時が来るのがいつも嬉しかった。しかし何と言うことか！この呼び声は、ナイチンゲールの歌のようなあの声が 2

カ月以上も聞かれていないとは」。よく知られた呼び声のいくつかは初期の古い歌、と言ってもいつかははっきりしないが、その中に残されている。そこから一部を引用すると次のような調子である‡：ー

‡「ロクスバラ　バラード」1560－1700 年　『ロンドンの呼び声の歴史』チャールズ・ヒンドリー著　第 2 版 1884 年 “Roxburghe Ballads”　*History of the Cries of London*

	（仮訳）
“Here’s fine rosemary, sage and thyme	ここに見事なローズマリー、セージ、そしてタイムがあるよ
Come buy my ground ivy	来て買っておくれよ 僕のカキドオシ
Here fatherfew, gilliflowers and rue	ここにナツシロコギク、ナデシコ類、そしてヘンルーダ
Come buy my knotted marjoram ho!	来て買っておくれよ 僕のマジョラムの束さ！
Come buy my mint my fine green mint	来て買っておくれよ 僕のミント、僕の見事なグリーンミント
Here’s fine lavender for your cloaths	ここに素敵なラベンダー、あなたの洋服にぴったりの
Here’s parseley and winter savory	ここにパセリと冬セイバリー
And heart’s-ease which all do choose	そして野生パンジー、みんながきっと選ぶはず
Here’s balm and hissop and cinque foil	ここにバーム［ヤマハッカ類］とヒソップとキジムシロ
All fine herbs it is well known	どれもこれも見事なハーブさ　誰もがご存じの
Let none despise the merry merry cries	みんな嫌がらないでおくれ　この愉快な愉快な呼び声を
Of Famous London Town.	有名なロンドン街の呼び声を
“Here’s penny royal and marygolds	ここにメグサハッカとキンセンカ
Come buy my nettle-tops	来て買っておくれよ 僕のイラクサの葉っぱ
Here’s water-cresses and scurvy-grass	ここにクレソンとトモシリソウ
Come buy my sage of virtue ho!	来て買っておくれよ 美徳の印、僕のセージさ！
Come buy my wormwood and mugwort	来て買っておくれよ 僕のヨモギ
Here’s all fine herbs of every sort	ここにあらゆる種類の見事なハーブ
Here’s southern wood that’s very good	ここにキダチヨモギ　すごくいい奴
Dandelion and houseleek	タンポポとヤネバンダイソウ
Here’s dragon’s-tongue and wood sorrel	ここにリュウノシタとコミヤマカタバミ
With bear’s-foot and horehound	クリスマスローズとニガハッカもご一緒に
Let none despise the merry merry cries	みんな嫌がらないでおくれ　この愉快な愉快な呼び声を
Of Famous London Town.	有名なロンドン街の呼び声を
“Here’s green coleworts and brocoli	ここに緑のキャベツとブロッコリー
Come buy my radishes	来て買っておくれよ 僕のハツカダイコン
Here’s fine savorys and ripe hautboys	ここに見事なセイボリーと熟れたベリー
Come buy my young green hasitings ho! *	来て買っておくれよ 僕の柔らかい緑のヘイスティング豆さ！*

Come buy my beans right Windsor beans	来て買っておくれよ 僕の豆、正真正銘ウィンザーの豆
Two pence a bunch young carrots ho!	一束２ペンス　柔らかいニンジンさ！
Here's fine nosegays ripe strawberries	ここに見事な香りの熟れたイチゴ
With ready pickled salad also	ピクルスにしたサラダもご一緒に
Here's collyflowers and asparagus	ここにカリフラワーとアスパラガス
New prunes twopence a pound	初物のプルーン１ポンドで２ペンスだよ
Let none despise the merry merry cries	みんな嫌がらないでおくれ　この愉快な愉快な呼び声を
Of Famous London Town.	有名なロンドン街の呼び声を

"Here's cucumbers spinage and frinch beans	ここにキュウリ、ほうれん草とサヤインゲン
Come buy my sallery	来て買っておくれよ 僕のセロリ
Here's parsnips and fine leek	ここにパースニップと見事なネギ
Come buy my potatoes ho!	来て買っておくれよ 僕のジャガイモさ！
Come buy my plumbs and fine ripe plumbs	来て買っておくれよ 僕のプラム、見事な熟れたプラム
A groat a pound ripe filberts ho!	１グロートで　１ポンドの熟れたヘーゼルナッツさ！
Here's corn-poppies and mulberries	ここにヒナゲシと桑の実
Goose berries and currants also	グーズベリーとカラントもあわせて
Fine nectarines peaches and apricots	見事なネクタリン、桃そしてアプリコット
New rice two pence a pound	新米は１ポンドで２ペンスだよ
Let none despise the merry merry cries	みんな嫌がらないでおくれ　この愉快な愉快な呼び声を
Of Famous London Town. "	有名なロンドン街の呼び声を

*ヘイスティング豆　143 ページ参照［第 7 章全文仮訳 8 ページ］

［訳注］fatherfew は feverfew［解熱効果のある伝統的薬用ハーブ、ナツシロギク］か？　frinch beans は french beans［サヤインゲン］か？